

写真で見る  
モンゴルの今

---

イラク難民の手作り絵本

---

イケア・ジャパンの草間氏

---

モンゴル7年目の豊田スタッフ

# SCJ 52





モンゴル最東部のドルノド県では昔から、危険で過酷な馬のレースが行われています。馬を走らせるのは子ども。馬主は子どもを騎手として雇う対価として、その親にお金や家畜を渡しているのです。

表紙写真: ©Adam Dean

#### About Booklet この冊子について

皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい——。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。

## Contents

4 [SCJ Report] 特別報告:モンゴル

### 写真で見る モンゴルの今

7 [SCJ Report] 特別報告:ヨルダン

### イラク難民の親たちが作った絵本

10 [Toy Box] モンゴルのおもちゃ箱

11 [Stakeholder Interview] 特別インタビュー

### イケア・ジャパン株式会社

コーポレートPRマネージャー 草間由紀氏 インタビュー

12 [Staff Episode] SCJの一員として

事業部 モンゴル事務所所長 豊田光明

14 [Topics] [Information]

15 [World's Picture] どうしても載せたかった写真

### シエラレオネのアミナタさんの話

発行: 社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F

ご支援に関するお問い合わせ: 03-6859-0068 (平日9:30-18:00)

印刷協力: 株式会社コア (この冊子は、株式会社コアのご協力により印刷・製作しています)

[スタッフ]

デザイン・編集: 株式会社ビーアールハウス

# SCJ Report

特別報告

## モンゴル



カメラマン  
D. ダバーニヤム  
D. Davaanyam

### 「僕がカメラで切り取るモンゴル」

以前、セーブ・ザ・チルドレンの支援を受けてプロカメラマンの道を歩み始めたD・ダバーニヤムくんが、モンゴルの子どもや家族の写真を送ってくれました。



泥酔した男性の前を家族が通る。それを追う彼の視線が物悲しい



子羊の肉をほおぼる男の子



マンホールに住む子どもたち。  
愛・家族・幸福感に欠けている



「大きくなったら恩返しするよ」  
赤ちゃんはぎっとそう思っている



SCの子ども保護センターの食事の時間

で、何通りもあるということですが。僕も先生に言われたとおり、人や物を、色々な角度から撮って現像して、「この写真はイマイチだな」とか「これは、イケてるかも!」と繰り返しているうちに、だんだんと写真がおもしろくなっていきました。

先生から課題が出されると、同じ講座を受ける仲間と一緒に、街の中心から貧困層の住むゲル地区まで、カメラを持ってアチコチを駆け回りました。そしてその時に、さまざまな境遇の子どもたちと出会いました。親の暴力に耐えきれずにマンホールに住む子、家族のために水汲みに出かける子、センターで食事をするホームレスの子……。誰一人として同じ子どもはいなくて、それぞれが必死に生きている。そのことを知った時、自分の写真を通して、世界の人たちにモンゴルの子どもや社会のことを伝えていきたいと心に決めました。

今、僕にとって3回目となる写真展の準備をしています。今



参加者が作った絵本。1番下が『ぼくの魔法のブーツ』

子どもに伝えたい「マイ・ストーリー」  
 イラク難民が、愛情をいっぱい込めて作った絵本たち。  
 この絵本作りの活動について、現地ボランティアだった  
 ブシュラ・ナシルさんが伝えてくれます。

## 子どもに伝えたい「マイ・ストーリー」

# SCJ Report

特別報告

## ヨルダン



ボランティア  
 (ワークショップ指導者)  
 ブシュラ・ナシル  
 Bushra Sh. Nassir

……ある夜、小さなサミールが  
 ベッドで寝ていると、一足のブーツ  
 が突然、話しかけてきました  
 「ねえサミール、これから一緒に  
 冒険に出かけよう！」  
 ビックリしたサミールは、言葉を  
 話すブーツにたずねました  
 「ブーツさん、僕をどこへ連れて  
 行ってくれるの？」  
 ブーツはこたえました  
 「君の行きたいところならどこへ  
 でも！」  
 サミールは少し考えて言いま  
 した  
 「じゃあ僕、イラクに行ってみた  
 いな！」  
 するとブーツは、サミールの小さ



今夜の宿を探すホームレスの子ども



ゲル地区に住む男の子。身を危険にさらしながら道路を渡る



ゲル地区の母と子



自然とけ込む子ども

回は、その写真展用も含めて、僕  
 がこの3年くらいの間に撮った  
 写真を数点、送らせてもらいま  
 した。僕の写真とメッセージが  
 日本にまで届くなんて、夢みた  
 いで感激しています。皆さんは  
 僕の写真を見て何を感じてくれ  
 るでしょうか？

\*\*\*

ダバーニヤムくんも学んだ写真講座  
 フォーカス・オン・キッズ (Focus  
 on Kids) は、低所得者居住区(ゲ  
 ル地区)に住む子どもたちが、創作  
 意欲を高めることで将来の夢や希  
 望を描くこと、また、写真撮影を通  
 じて自分の考えや想いを伝えるこ  
 と、仲間との共同作業で社会性・協  
 調性を高めることをサポートする  
 ために、SCと現地NGO「アーツ・  
 カウンシル・オブ・モンゴリア」の共  
 催で、2005年から2009年6  
 月まで実施された活動です。

な足をつつむと窓から大空へ羽ばたきました……

\* \* \*

皆さん、初めまして。私はブシラ・ナシルといいます。私はイラク人ですが、今年10月までヨルダンで避難生活を送っていました。今は娘の住むイギリスに移住したばかりです。

私の住んでいたイラク人居住地域では今年から、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(以下SCJ)による、親を対象にした絵本作りのワークショップが開かれています。私はこの活動に意義を感じて、途中からボランティアとして関わらせてもらっていました。

このワークショップは、避難生活で十分に教育を受けることのないイラク人の子どものために、親が絵本を作り、その絵本を通して文字や数を教えたり、生きていく上で大切なことを子どもに伝えようというものです。子どもの学びの機会を親の手で作作り、親子で触れ合う時間をもっと増やそうという取り組みです。

冒頭で紹介したのは、参加者の

## 絵本にはすばらしいメッセージが込められています。

一人が息子のために作った絵本『ぼくの魔法のブーツ』の一節です。この後、主人公のサミールは、首都バグダッドからヤシの木の中を旅します。ページをめくるたびに、作者の祖国への想いがひしひしと伝わってくる絵本です。このワークショップで参加者は、家庭にあるものを活用しながら絵本を1冊作り上げます。古着を使ったものや、絵本に貼り付けた穀物を指でなぞることで数字やアラビアアルファベットを学べるものなど、参加した大人たちは工夫をこらして絵本を完成させていました。



ワークショップの運営について熱心に話すボランティアたち

中には、「子どもに本当に伝えたいことは何だろう」「自分だからこそ伝えられることって何だろう」と真剣に考え始める参加者もいました。そうやって思いを巡らせていると、祖国イラクでの戦争体験を思い出したり、今の生活や将来への不安、慣れない土地での疎外感を改めて感じてしまう人もたくさんいたようです。

でもワークショップの会場には、同じ境遇の人々が集まって来るので、参加者同士、子どもの前では決して言えない悩みなどをお互いに打ち明け、気持ちを共有することで、だんだんと安心感や連帯感が生まれて、一緒に絵本を作ったりしていました。

そうやって交流しながら完成させた絵本の中には、「人への思いやりや幸せをわかち合う心を持ってほしい」「どんな時もユーモアを忘れないでほしい」「自然



時間を忘れて絵本作りに没頭

を大切にしてほしい」といった、子どもへのすばらしいメッセージが書かれていました。

ワークショップが終わる頃、会場にはオレンジや赤の鮮やかな絵本が並びました。帰り際に、「参加してよかった」と言っても聞かされると、指導する私も本当に嬉しかったです。私自身も戦争を経験して、大変落ち込み無力感に襲われていました。ですから、ワークショップで参加者のお手伝いが出来たことや、参加者に必要とされ、誰かの役に立てたという充実感は、今の私の生きる原動力になっています。

参加した大人たちが家に帰って、制作した絵本を子どもに読み聞かせてくれること、そして継続して子どもの教育に自ら関わってくれることを願ってやみません。

\* \* \*

SCJは、皆さまからのご寄付とJPFの助成により、イラク人・ヨルダン人の親と子ども約2000人を対象に緊急教育事業を実施しています。早期幼児教育を十分に受けられない子どもたちへ教育の機会を提供するために、親や教育関係者に子どもへの保護や教育の大切さを伝え、絵本作り研修を行っています。



完成した絵本をさっそく読み聞かせる

誰かのために貢献することは難しいことではない  
 「子どもは世界でもっとも大切なもの」という考えを持つイケアでは、児童労働の防止に力を入れていきます。そもそもSCとの関わりは90年代、児童労働に対する行動規範の作成にアドバイスを受けたことがきっかけで、SCなどの専門機関と協力することで子どもを取り巻く問題の根本的な解決になればと、SCとのパートナーシップが始まりました。  
 イケアでは子どもたちがよりよい人生のスタートを切るための、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。例えば、クリスマスまでの時期に合わせて「ソフトトイキャンペーン」を行い、世界の子どもたちを支援する活動に寄付しています。



## イケア・ジャパン株式会社

コーポレートPR マネージャー 草間由紀氏 Yuki Kusama

### 1ユーロは宝物

クリスマス期間中(2009年度は、11月1日から1月3日)、販売されたソフトトイ(ぬいぐるみ)1個につき1ユーロが、SCとユニセフが30ヶ国以上で実施している教育プログラムに寄付されます。2003年からスタートし、これまでの寄付総額は1,670万ユーロ(約22億円)。日本では今年で4回目になります。

このキャンペーンは、親御さんだけでなく小さなお子さまが自分のお小遣いでソフトトイを購入しても立派な貢献になります。人のために貢献することは、決して難しいことではないのです。  
**イケアを取り巻くすべての人が幸せであるために**  
 イケアの企業理念は、「より快適な毎日を、より多くの方々に提供する」こと。この「より多くの人々」という言葉には、イケアのビジネスに関わっているすべての人を含んでいます。お客さまはもちろん、社員も幸せでなければ企業は成長出来ません。  
 「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」という言葉がありますが、イケアではよい仕事をするには趣味も睡眠も、そして家族を大切にしている時間も重要であると考えています。限られた時間の中で生産性を上げるのは簡単ではありませんが、プライベートが充実しているからこそ、仕事の効率を高めることが出来るのです。  
 ネバーエンディングジョブ——終わらなき取り組みというスローガンのもと、イケアは今後も低価格で安全性の高い商品をお届けし、すべての子どもたちの幸せを応援します。



店舗内のソフトトイ売り場

子どもは世界でもっとも大切な未来の世代のために出来ること  
 子どもの権利保護、労働環境の整備、自然保護などの活動に積極的に取り組むスウェーデン発の家具チェーン・イケアは現在、SCの最大の企業パートナーとなっています。今年でSCとのパートナーシップ15年目を迎える同社のCSR(企業の社会的責任)について教えていただきました。



## Toy Box

モンゴルのおもちゃ箱



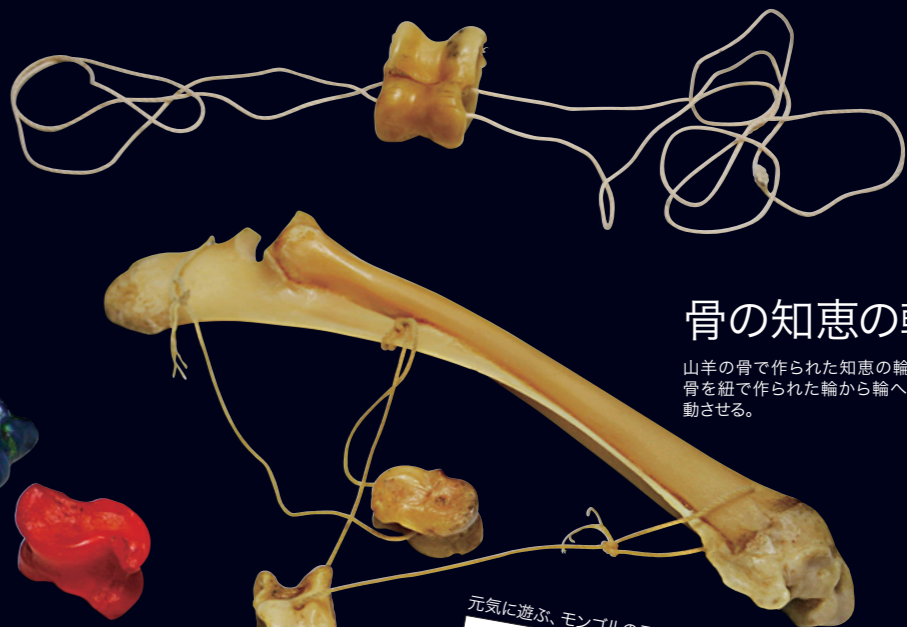
遊ぶことは学ぶこと。遊びは子どもたちの笑顔を生み、協調性や創造性を豊かにします。世界中の遊びや玩具を通して、子どもたちの世界を覗いてみましょう。

### 骨のブンブン独楽

糸の両端を持ち、山羊のくるぶしの骨を回転させて遊ぶ。

### シャガイ

山羊や羊、馬、らくだなどの家畜のくるぶしの骨を利用した遊び道具。写真は山羊のもの。



### 骨の知恵の輪

山羊の骨で作られた知恵の輪。小骨を紐で作られた輪から輪へと移動させる。

## 遊牧民ならではの 家畜の骨を利用した玩具

広大な国土を持つモンゴルは、牧畜などが盛んです。そんな遊牧民ならではのおもちゃが、家畜の骨を利用したもの。日本でもおなじみのブンブン独楽や知恵の輪も骨で作られています。

中でもポピュラーなのがシャガイと呼ばれる家畜のくるぶしの骨。おはじきやお手玉、サイコロ遊び、占いにも使われます。シャガイで遊ぶのは冬で、夏には遊びません。その理由として夏は家畜が増える季節であり、大切な家畜の骨を転がしたりするのは縁起が悪いと考えられているからです。玩具を通して、家畜を大切に暮らすのが出来るかな。



元気に遊ぶ、モンゴルの子どもたち

©Kullwadee Sumnalop

©Madhuri Dass/SC

協力: 日本玩具博物館

## 偶然聞いた会話が NGOの世界へ飛び込む きっかけになった

開発支援の仕事を選んだ動機は単純で、社会的・経済的に恵まれない人々を助ける仕事に就きたい、同時に好きな海外旅行も兼ねることが出来たらという発想からでした。医師を目指していましたが、大学生活6年目に自分には無理だと悩んでいました。そんな時、カフェで偶然隣に座った学生が「大学院で公衆衛生学の修士課程に入学が決まった」と言っていたのを耳にして「これだ!」と思い、すぐに同じ大学院へ入学。修士課程を終了し、NGOの世界に飛び込

## すべての子どもが よりよい環境の中で教育を受け 子どもらしく生きられるように

モンゴル事務所所長として、チームをまとめる豊田スタッフ。3児の父親でもある彼が、開発支援の仕事を選んだ動機や活動への思い、モンゴルの子どもたちを取り巻く問題について語ります。

モンゴル事務所の机にて



みました。

1998年初めてモンゴルを訪れた時、驚いたのは地域間の生活水準の格差でした。当時、首都ウランバートルの中心部は近代化の真ただ中。しかし一歩郊外に出れば、上下水道などの公共設備が整っていない居住地域がほとんどで、11年たった現在も状況は改善されていません。

生活環境が子どもに与える影響は甚大で、生活水準の低い地域で暮らす子どもたちの中には、多くの発育不良児が存在します。郊外の子どもの身長が都市部の学校に通う同年代の子どものたと比べ、1回りも2回りも小さい姿を目の当たりにした時は、大変なショックを受けました。そして、貧困の世代間連鎖を断



セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン  
事業部 モンゴル事務所所長

# 豊田光明

Mitsuaki Toyoda

ち切る努力をしようという思いを新たにしました。

## 父親として気がかりな 教育問題もモンゴルの 遊牧民に比べれば小さいもの

私にはモンゴル人の妻との間に、7歳、4歳、1歳の3人の子どもがいます。父親として最も気がかりなのは、子どもの教育のこと。彼らの今後の人生を考えると不安は尽きませんが、遊牧民の家族に比べたら私の悩みなど取るに足らないものかもしれません。

モンゴルでは半数近くの子どもが幼児教育を受けられずにいて、中でも遠隔地で暮らす遊牧民にとって子どもの教育は切実な問題です。基礎教育を受けさせるならば、子どもが6歳になった時、親元から離れて寮に入れた小学校に通わせるか、親戚の家に子どもを預けて学校に通わせるか、もしくは両親が別居し母親と子どもが街に移り住んで小学校に通わせるかという究極の選択を迫られるのです。早い

時期に親元を離れた子どもが教育のベースや寮生活になじめず、ドロップアウトするケースも少なくありません。

## 優秀な現地スタッフが 能力を発揮出来る 職場の基盤作りを

現在、私たちが特に力を入れているのは、子ども保護の制度確立に向けた活動です。日本という児童相談所が確立されていないモンゴルでは、子どもが虐待を受けてもほぼ発覚することはありません。この状況を改善するために国際NGOの現地代表として、政治家や官僚の方々とお会いし、子どもの権利実現

に向けた法律・政策の形成や改正を働きかけることも重要な業務のひとつ。その際、対等に議論し相手の説得するには、あらゆる分野の基礎知識と社会事情に精通していることが必要です。そのため日々知識を蓄え実行に移していくことに大きなやりがいを感じています。

SCがモンゴルで支援活動を始めてから15年目となります。今後さらに成果を上げていくために、組織の基盤を安定させること、特に一緒に働く優秀なモンゴル人スタッフがやりがいを持って仕事が出来る環境を作ること、それが現地代表としての一番の役目だと考えています。



SCがモンゴルで支援活動を始めて15周年の記念式典にて



現地のスタッフ・子どもたちと。写真中央が豊田スタッフ



シエラレオネのアミナタさん、娘のファツマタちゃん(写真右)、息子のジャメスくん(写真中央)



## World's Picture

どうしても載せたかった写真

### 「子どもたちが、ずっと健康に生きられますように……」 シエラレオネのアミナタさんの話

アフリカ大陸の西部に位置する国、シエラレオネ。この国では、4人に1人の子どもが5歳の誕生日を迎えられずに亡くなっています。

写真は、シエラレオネ東部の、SCJが支援する診療所で出会ったアミナタさんと、再婚して授かった3歳の娘ファツマタちゃんと1歳の息子ジャメスくんです。「子どもたちは大きな病気もせず元気に育っていて、そのことがとても嬉しい」とアミナタさんは言います。

「実は、10年前に内戦で亡くなった前夫との間に3人の子どもがいました。でも3人とも1歳の誕生日さえ迎えられずに次々に亡くなってしまった

んです」。亡くなった理由は下痢と発熱でした。でもその頃は近くに病院もなく、隣国のギニアまで薬を買いに行ったこともあるそうです。

再婚して赤ちゃんを授かって、わが子をすぐに失ってしまうのではないかと、不安だったアミナタさん。でも、近くに診療所が出来てから、子ども2人はワクチンをすべて接種し、医者が処方した薬を飲めるようになりました。母乳育児のこと、衛生面のことも習って、家族は健康な生活を送ることが出来るようになりました。

「子どもの未来に希望を持てるようになりました」そう言って、心からの笑顔を見せてくれるアミナタさんでした。

今年9月末に発生したインドネシア・スマトラ沖地震に対する緊急募金、そして7月から実施しております『～母乳で赤ちゃんを守る～ OPPAI PROJECT(オッパイ・プロジェクト)』に対し、いつもご支援をいただいている方々から、更に多大なご支援をいただきました。編集後記という枠で恐縮ではありますが、ご協力いただきました皆さまに感謝を申し上げます。ありがとうございました。いただいた募金は大切に活用させていただきます。

岡田 茜 (SCJスタッフ)



2009年現在、年に900万人の子どもが、肺炎やはしか、下痢、マラリア、栄養失調などの予防や治療が可能な病気で亡くなっています。セーブ・ザ・チルドレンは、子どもが無意味に命を落とすことのないよう、子どもの命を守るための新キャンペーン「EVERY ONE(エブリワン)」を開始しました。

## Editor's Note

編集後記

### 国際協力を知るための 企業による「Hi5!」を実践

8月19日と21日にそれぞれ、株式会社NTTデータ様、株式会社資生堂様との協働で、社員子どもたちが、紛争下の子どもたちや難民について学ぶ機会を設けました。いずれも、SCJオリジナルのポスター式教材「Hi5!」を活用したもので、夏休みの子どもたち合計80名に、社員ボランティアが熱心に世界の子ども達の現状や国際協力活動について伝えました。



ボランティアの説明に聞き入る子どもたち

### ネパール JICAの支援で 新事業を開始

「11月より、JICAの支援を受け、ネパール東部平野部における約5万人の子どもを対象に、教育事業を新たに開始しました。学校関係者や地域住民、そして子どもたちを含めたコミュニティの参加による学校運営の改善を中心に、教員研修や学校施設の修復を含めた教育の質の改善に向けた活動を行ってまいります。低位カーストの出身者が多く、就学率や小学校修了率などが低いこの地方で、子どもが質の高い教育を受けられるよう尽力してまいります」



鈴木彩乃スタッフ

### 第22回 セーブ・ザ・チルドレン チャリティ・ディナーを開催



10月21日、SCJの主催で開催されたチャリティ・ディナーは、各国大使をはじめ316名がグランドハイアット東京に集い、

渋谷SCJ事務局長が新グローバルキャンペーン「EVERY ONE」の発表を行うなど、社会貢献について語り合う一夜となりました。今年も、秋篠宮妃殿下にご来臨いただき、SCJ活動報告にも耳を傾けていただきました。当イベントの参加費の一部は、SCJの活動を通じて世界の子どもたちの支援に役立てられます。

## Information

### リンクス オブ ロンドン フレンドシップ プレスレットに 新カラー登場

イギリス発のコンテンポラリージュエリーブランド、リンクス オブ ロンドン様のフレンドシップ プレスレットにこの冬、新カラーのオレンジとイエローが加わりました(税込価格29,400円)。日本では2007年よりフレンドシップ プレスレット全商品の売上の10%がSCJに寄付されており、世界の子どもたちの支援活動に役立てられています。



お問い合わせ:  
リンクス オブ ロンドン  
青山店  
03-3408-4509

素材はシルバーと  
シルクコットン

### ヒルトン小田原リゾート&スパ 募金箱設置中

ヒルトン小田原リゾート&スパ様は、今年4月19日の開業5周年イベント開催日からブラッセリー「フローラ」やヒルトンショップをはじめとした、館内のレストランおよびショップにおいて、SCJ募金箱を設置いただいています。この募金は12月に開催いただく「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン クリスマス贈呈式」にてSCJへ寄付されます。



ヒルトン小田原リゾート&スパ

### ブルガリ スペシャル・ チャリティ・コレクションを特別公開

チャリティ・ディナーの協賛社の一つであるブルガリ様のスペシャル・チャリティ・コレクションが一晩限り、チャリティ・ディナーの会場にて公開されました。ハイジュエリーと限定ウォッチ計18点におよぶ同コレクションは、日本での公開の翌日にはドバイに向け旅立ち、アメリカ各地を巡回後、12月8日にクリスティーズ・ニューヨークにてオークションに掛けられます。本オークションはブルガリ様が本年の



目標に掲げた1,000万ユーロ(約13億円/2009年10月現在)のSCJへの寄附の一部を担います。

